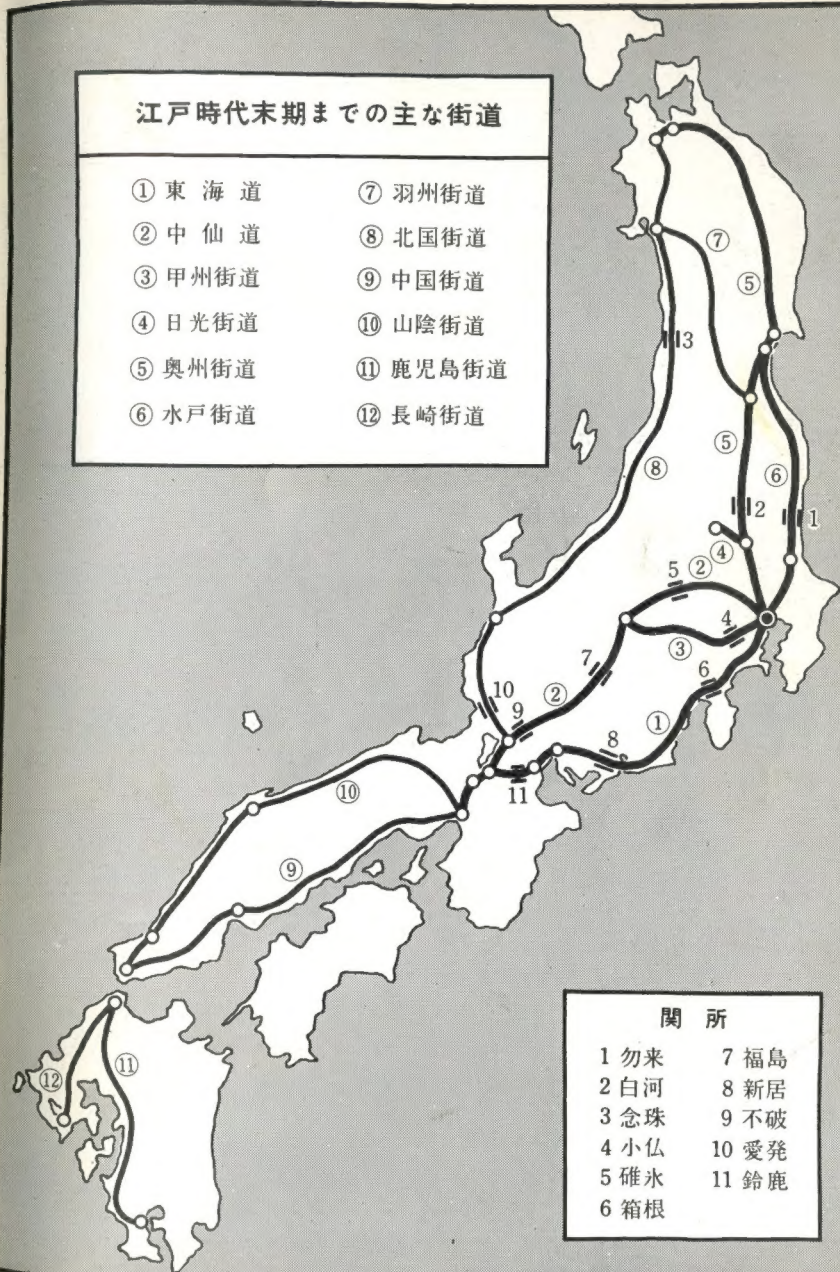
東海道五十三次

岩波写真文庫　187

東海道五十三次
187

岩波写真文庫 187 東海道五十三次

編集 岩波書店編集部
写真 岩波映画製作所

広重自画像,「江戸名所品川」(1853)

今でこそ私たちは列車にのれば東京大阪間を八時間ですぎてしまう。車窓に富士山を仰いだり海をみたり快適な旅に違いない。しかし以前は、少くとも八十年まえまでは東海道の旅は歩き、馬にのり、駕籠にゆられた長い旅路であった。東海道百二十五里、五十三次の旅は文にかかれ、歌に詠まれ、絵に描かれた。広重は天保五(一八三四)年、有名な「東海道五十三次続絵」を出版している。ここにこの版画を観賞しながら、私たちも東海道五十三次をたどってみようと思う。

本書に集録された版画は渡辺庄三郎氏の好意によったものが多い。

東海道みちしるべ

目 次

定価100円 1956年5月25日 第1刷発行 1958年4月20日 第5刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

江戸時代末期までの主な街道

① 東海道
② 中仙道
③ 甲州街道
④ 日光街道
⑤ 奥州街道
⑥ 水戸街道
⑦ 羽州街道
⑧ 北国街道
⑨ 中国街道
⑩ 山陰街道
⑪ 鹿児島街道
⑫ 長崎街道

関所

1 勿来
2 白河
3 念珠
4 小仏
5 碓氷
6 箱根
7 福島
8 新居
9 不破
10 愛発
11 鈴鹿

東海道五十三次

○ 宿場　峠　東海道本線　徒歩渡　船渡　関所

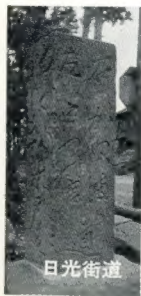
宿場			
1 品川	12 沼津	26 掛川	40 鳴海
2 川崎	13 原	27 袋井	41 宮
3 神奈川	14 吉原	28 見付	42 桑名
4 保土ヶ谷	15 蒲原	29 浜松	43 四日市
5 戸塚	16 由井	30 舞坂	44 石薬師
6 藤沢	17 興津	31 荒井	45 庄野
7 平塚	18 江尻	32 白須賀	46 亀山
8 大磯	19 府中	33 二川	47 関
9 小田原	20 丸子	34 吉田	48 阪之下
10 箱根	21 岡部	35 御油	49 土山
11 三島	22 藤枝	36 赤坂	50 水口
	23 島田	37 藤川	51 石部
	24 金谷	38 岡崎	52 草津
	25 日坂	39 池鯉鮒	53 大津

日本の街道

人が住むところには道ができる。お互の連絡も道を通してなされる。道が発達すればするほど文化はさかえ、国も大きくなる。道路と文化の発達は表裏一体の関係にあるといえる。道路は国の血管ともいえる。日本にも、東海道をはじめ北陸道・中仙道など沢山の道路がある。大和時代には近畿を中心に道がひらけ、大化改新（六四六年）には唐制に倣い大道を修造し、帰化人に道路の開発をはからせている。奈良時代には殆んど全国に路がひらけ、国府がその路の管理にあたった。道中には橋を架け木を植え駅制をととのえ、更に平安時代には駅馬を置き至急の用務にそなえた。源頼朝が鎌倉に幕府をひらくと京都と鎌倉との間の交通は頻繁になり東海道は全国で一番発達した街道となった。頼朝は集権の実をあげるため交通政策に力を注ぎ駅路の制を定

栃本関所

相模川旧橋脚

めた。当時の東海道は京都・鎌倉間百二十余里、六十三次であった。延応元（一二三九）年には両都間を飛脚は四日で走った事が吾妻鏡にみえる。戦国時代には敵の機先を制するためにも道路が整備されたが、他領との境は自ら護るために放置した。国内統一の第一歩をすすめた織田信長は天正三（一五七五）年、荒廃した諸国の道路を改修している。信長・秀吉の後をうけた徳川家康は関ヶ原合戦（一六〇〇年）後、東海道を五十三駅と定め、他の街道をも整えていった。五街道は五海道ともいい起点および終点は次の様である。東海道（品川から大津まで）、中仙道（板橋から守山まで）、日光街道（千住から鉢石まで）、甲州街道（内藤新宿から上諏訪まで）、奥州街道（白沢から白川まで）。しかし他に水戸街道、佐倉街道を入れて七街道ともいっていたらしい。これら主な街道の外に山道をさけて迂回したり、海路をさけ陸路をたどる脇街道があり、婦女子がよく利用したので姫街道とも呼ばれた。そのほか特権者の通る路（日光御成道、例幣使道）があり、杉並木を植えたりして重要視した。江戸幕府の交通政策は公用を第一としていたために特権階級者には好都合であったが、庶民の旅は苦労が多かった。街道の雲助とゴマのハエはうるさく旅人にからみ山道には強盗が横行した。役人は権威をかさに妨害したので庶民はいつも不安を抱いて旅をつづけた。この頃の道中記文学、芸術は旅の模様をよくあらわしている。

甲州街道（右）

中仙道

木曽路

奥州街道

日光街道

日光街道

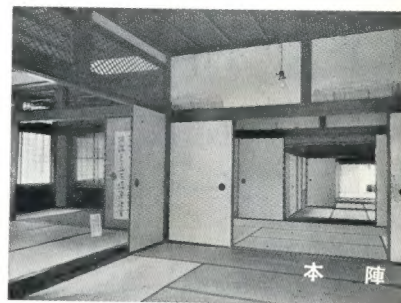
並木　石畳

街道の施設

街道には種々の設備があった。奈良時代には既に**並木**が植えられていたが江戸時代になると五街道をはじめ脇街道にもれなく植えられるようになった。ほとんど松で立枯や野火でたおれてもすぐ整備した。杉並木は日光街道をはじめ箱根峠などにみられる。そのほか桧・柳・榛の並木もあったが松並木が圧倒的に多かった。並木とともに路傍を整備したものに**一里塚**がある。織田信長の頃に築かれたともいわれるが徳川幕府は江戸日本橋を一里塚の起点に定め三十六町を道一里として五畿七道に築い

手形

関所

た（慶長九年）。江戸初期の道中宿泊所は木賃宿で、それも農家の副業であったが万治年間には専業化し**旅籠**となり食事や夜具を供した。東海道ではほとんど駅ごとに旅籠ができ、それとともに遊女もあらわれはじめた。庶民の宿場は旅籠であったが特権階級者が休泊するところは**本陣**といわれ街道の要所々々におかれた。本陣は足利時代にはじまったともいわれる。江戸時代に参覲交代が実施されてから大名諸侯は**関札**をかかげて本陣に休泊した。**関所**は幕府が経営した関門であり、東海道では江戸時代、箱根・新居に関所がおかれた。関所を通るには**通行手形**を必要とした。それは幕府が江戸に武器が運び込まれることと江戸から大名諸侯の妻子が出てゆくこと（出女と入鉄砲）を警戒したためであった。一方、各藩では口留番所を置いて藩境を警備した。**その他**、街道ぞいの河川には橋を架け、大井川のような大河には渡渉人夫がいた。また至急の用を足す飛脚や物資運搬のために伝馬・雲助人夫を駅に配置した。飛脚は江戸・京都間を最高二十八時で走ったことが記録にある。伝馬と雲助は問屋がかかえていた。問屋の監督には道中奉行があたった。このようないろいろの機構によって江戸時代の街道は確保されていた。明治維新（一八六八年）とともにこの機構もなくなった。しかし、今日でも国道は街道ぞいに通じているところが多い。

一里塚

追分

道標

旅籠　本陣

「東海道名所一覧」北斎筆(1818)

東海道の文芸

街道を旅するうちに色々な文学がうまれた。東海道は日本の主要街道であったために古来おおくの文学が残されてきた。古くは万葉集に歌われ、東鏡・更級日記・十六夜日記・東関紀行・海道記など幾多の作品にかかれてきた。しかしこれらは文字に残されたものであった。街道、とくに東海道が絵にかかれはじめたのは江戸・京都間の交通が頻繁となった江戸時代に入ってからである。その最初と考えられているものが菱川師宣の東海道分間図「**東海道名所絵図**」五巻、元禄三(一六九〇)年である。この絵図は肉筆の彩色を加えた当初としては画期的なものであったと言われている。絵入本の最初のものは宝永六(一七〇九)年に出版された「**東海道駅路之鈴**」五冊で、体裁のととのった街道案内記である。これに倣い天保元(一八三〇)年「狂歌東関駅路鈴」(著者不明)が出版されている。天明六(一七八六)年の「**東海木曽両道中懐宝図鑑**」は上段を東海道、下段を木曽路に分けた兼用の案内記である。文人画家として著名な司馬江漢は天明八(一七八八)年、長崎へ旅した時の「西遊日記」六冊を著している。これらは名所地誌とその挿絵の形式あるいは随筆の形式をとり、江戸から京都への順序をたどっている。寛政九(一七九七)年には「**東海道名所図絵**」六冊が大阪の竹原春泉斎、江戸の蕙斎政美を中心に応挙・光貞・友汀など三十人の手になる挿絵を入れた絵本として出版されている。この「東海道名所図絵」は京都より江戸への順序を追っている。享和二(一八〇二)年に十返舎一九は「東海道中膝栗毛」を書き、山東京伝は浮世絵研究書として著名な「浮世絵類考」を著している。文政元(一八一八)年に葛飾北斎は「**東海道名所一覧**」として大判の紙面に日本橋から三条大橋までをまとめている。このほか道中双六の形式をとったものも多く、北斎は広重とならび作品数も多い。「**東海道五十三次**」の続絵(一駅を一枚に描いたもの)は北斎の作が早いものであろう。文化元(一八〇四)年出版の北斎の続絵は広重の「東海道五十三次」の続絵と並び有名である。他にも北斎・広重に倣い続絵が世にでたが、いずれも模倣の域を出なかった。北斎と広重は世界的に有名である。

「東海木曽両道中懐宝図鑑」(1786)

「東海木曽両道中懐宝図鑑」(1786)

「東海道駅路之鈴」(1709)

「東海道名所図絵」(1797)

「東海道五十三次」北斎筆(1804)

「東海道名所絵図」全五巻、師宣筆(1690)

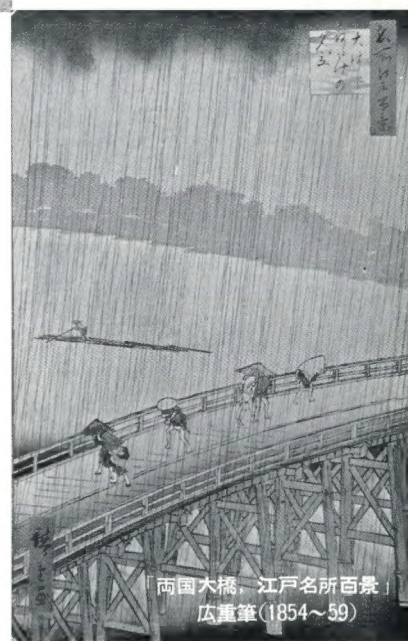
「東海道名所絵図」全五巻、師宣筆(1690)

「四日市，東海道五十三次」広重筆(1834)

「蒲原，東海道五十三次」広重筆(1834)

「赤阪，東海道五十三次」広重筆(1834)

安藤広重について

浮世絵は明和二(一七六五)年頃鈴木春信の錦絵とよばれる多色摺版画で盛んとなった。天明年間には勝川春章・鳥居清長、寛政年間には喜多川歌麿・東洲斎写楽などが輩出して浮世絵全盛時代をむかえた。全盛時代をすぎ文化文政(一八〇五—一八二九)年間には今まで美人の立姿の背景として描かれていた風景が徐々に独立し、北斎・広重が描いた美人姿の背景は最早、前時代の美人画とは違ったものになった。つまり背景の風景に力を注ぎ、主として人物を風景に調和させる傾向にあり、広重の風景版画は完全に人物を点景化している。また広重の風景版画は北斎が対象を特に主張させた様には描いていない。むしろ人間と自然とをあたたかい感情でつつんでいる感じであり、旅情画家といわれるゆえんでもある。

広重は姓を安藤といい一遊斎、一立斎または立斎と号し、文化八年歌川豊広の門に入り、翌年広重の名をうけて独立し、役者絵・美人画をも作ったが天保初年頃よりは風景画と花鳥画を描き、北斎とは対蹠的な画風を示した。安政五(一八五八)年五十二歳で没したといわれる。本書に収めた「東海道五十三次図絵」は広重の代表作とされる天保五(一八三四)年竹内保永堂出版の版画を主にあつめたものである。

「両国の宵月，東都名所」広重筆(1830～36)

「両国大橋，江戸名所百景」広重筆(1854～59)

「赤富士，富岳三十六景」北斎筆(1828～43)

「吉原，五十三次名所図会」広重筆(1854～59)

「おし鳥」広重筆(1832)

「花鳥」北斎筆

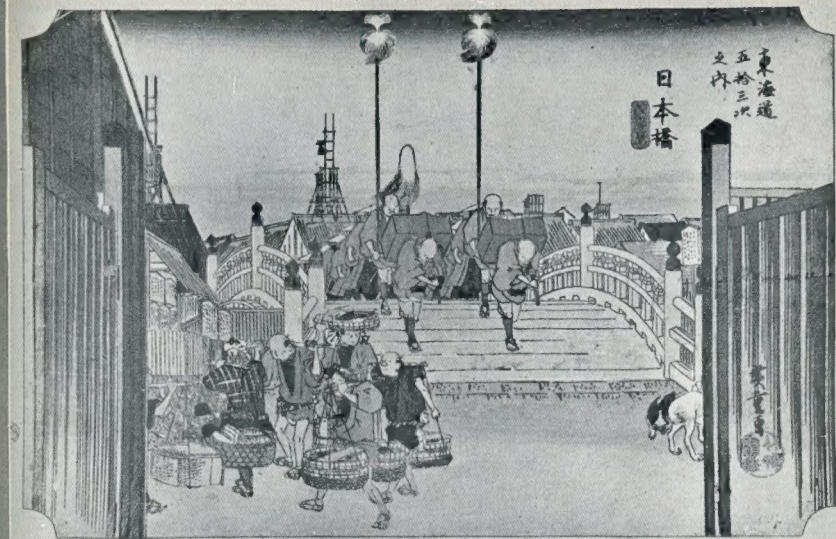
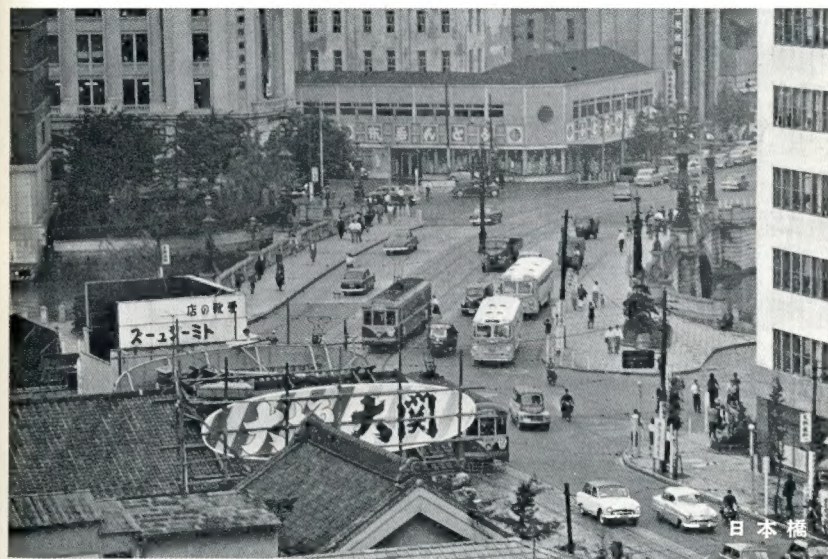
東海道五十三次、百二十五里、旅の振り出しはお江戸日本橋である。今では橋の中央に道路元標が立つ。人口八百万の大東京。品川あたりもすっかり姿を変えた。埋めつくされた海岸は数百本の煙突が櫛比する大工場地帯である。更級日記の「紫生ふときく野も蘆荻のみ高く生ひて馬に乗りて弓もたる末見えぬまで高く生ひ茂りて」の面影は全くない。

京浜第1国道

鈴ガ森刑場址

品川駅

〔名所〕泉岳寺．増上寺．日本橋．台場．京橋．浜離宮

品川〔諸侯出立〕五十三次の最初の宿場．東海道中の館駅の首位．　江戸日本橋より二里．

日本橋〔朝之景〕江戸をあとに朝もやをついて大名行列の出立．東海道五十三次の振出し．

日本橋

日本橋．人口800万の大東京の都心．人口密度2万．この辺りは1日6万台の自動車の渦．

京浜工業地帯

神奈川は今の横浜市神奈川区。徳川幕府三百年鎖国の夢を破った黒船来航の地である。「東海道中膝栗毛」に「爰は片側に茶店軒をならべ。いずれも座敷二階造。欄干つきの廊下桟などわたして。浪うちぎはの景色いたってよし。茶屋女『おやすみなさいやアせ。あったかな冷飯もございやアす』…」。横浜は海の玄関、年間四千隻の出船入船でにぎおう。

横浜港

生麦事件址

〔名所〕鶴見総持寺．杉田梅林．本牧．三渓園．横浜港

神奈川〔台之景〕 川崎から神奈川まで台地が海に迫り金屛海(きんぴようかい)と呼ばれた．川崎より二里半．

川崎〔六郷渡舟〕 道中最初の渡場．江戸浄瑠璃に有名な矢口渡(やぐちのわたし)は川上． 品川より二里半．

検問所

〔名所〕川崎大師（平間寺）．本門寺 〔名物〕浅草のり

六郷大橋

六郷川をわたれば川崎。元禄年間には架橋されたが、その後渡船になった。江戸浄瑠璃の傑作「神霊矢口渡」の舞台はやや上流にあたるという。その川崎宿も今では京浜工業地帯の中心、大工業都市に成長した。のびられるだけ海面にのびた埋立地に並ぶ工場からは昼夜をわかたず煤煙がはきだされる。びっしりと建てこんだ街、工業都市川崎である。

京浜第２国道

戸塚駅ちかくで

八丁並木

国道(左)と有料道路(右)との追分

早朝に江戸を発って最初の夜はこのあたりでむかえる。鎌倉へ別れる道は戸塚宿のちかく。弥二北八第一日の行程もここで終っている。

〔名所〕鎌倉山．称名寺．常楽寺．青蓮寺．大船大観音

戸塚〔元町別道〕 鎌倉への別れみち．道中最初の日が暮れる辺り．保土ヵ谷より二里九町．

保土ヵ谷〔新町橋〕 江戸を離れこの辺りから旅気分．程谷ともいう．神奈川より一里九町．

保土ヶ谷は今の横浜市保土ヶ谷区。東京から国電で三十分たらずの距離である。車窓からみる景色はこの辺りから都会を離れた田園のおもむきに変ってゆく。日本橋を去る八里余の道程、道中の昔、江戸を離れる者はこの辺りから漸々旅の気分になる。

〔名所〕芝生村窟．柏尾川さくら並木

旧東海道

手前より国道，東海道，東海道本線

輸出用ネッカチーフ

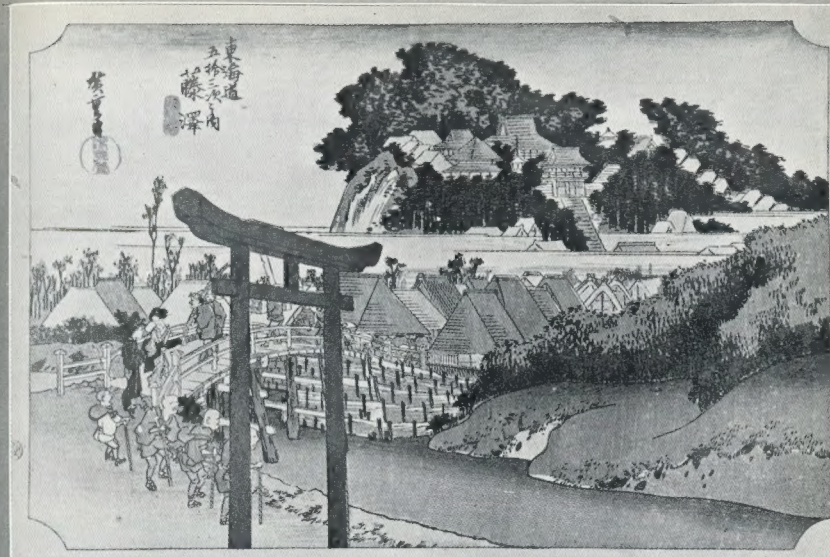
平塚駅

平塚一帯は東京・横浜の住宅地である。すぐれた風光はその昔、数々の文学になった。菅原孝標女は更級日記で「唐土が原といふところも砂子のいみじう白きを二、三日ゆく。『夏は大和撫子の濃く薄く錦をひけるやうになむ咲きたる。これは秋の末なれば見えぬ』というに云々」は楽しいのどかな旅を想像させる。彼女がここを通ったのは寛仁四年。

ガソリン・スタンド

〔名所〕須賀湊．金目観音．寒川神社．相模国分寺址

国道(左)と東海道(右)

平塚〔縄手道〕 海を望んだ坦々たる駅路 古くは唐土ヶ原と呼ばれた 藤沢より三里半．

藤沢〔遊行寺〕 謡曲「遊行柳」の舞台．この辺は砥上原と呼ばれた．戸塚より一里三十町．

江の島道しるべ

〔名所〕遊行寺．伊勢山公園．相模川旧橋脚．大岡忠相墓

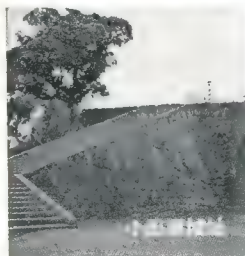
遊行寺

相模川

「柴松のくずの茂みにつまこめて砥上ヶ原に小鹿なくなり」西行法師。

「浦ちかき砥上ヶ原に駒とめて片瀬の川の汐干をぞまつ」鴨長明。

藤沢の西郊に字領家という所がある。そこの一民家の庭に源義経の首を洗ったという井戸があり、四町ほどはなれた白旗神社に義経の首を祀ってあるというが、もちろん一伝説にすぎない。

天正十八年七月、数ヵ月に亘る豊臣秀吉軍勢の包囲のために小田原城は落城し北条氏はほろんだ。ここから東海道は箱根にさしかかる。国道も湯本の谷から山へのぼる。

〔名所〕小田原城址．二宮尊徳誕生地．〔名物〕ういろう

小田原〔酒匂川〕 小田原は北条氏の城下町　箱根越えに草鞋をととのえる　大磯より四里．

大磯〔虎ヵ雨〕 大磯の手前で道は海に迫る　鴫立沢は旅の足を留める　平塚より二十七町．

〔名所〕三社権現．花水橋．鴫立沢．サンダースホーム

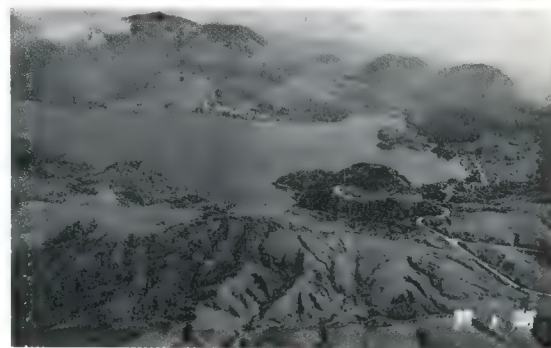
西行法師が東路行脚のとき秋の日暮れの寂しさに詠んだ歌、「こころなき身にもあはれはしられけり鴫立沢の秋の夕ぐれ」は三夕歌の一つとして人口に膾炙している。大磯のあたりで道は海岸にちかづく。国府津から小田原へかけた海浜一帯は小餘綾磯（こよろぎいそ）ともいわれていた。「さがみ路のよろぎの浜のまさごなす児らくかなしくおもはるるかも」(万葉集)。

箱根の山をはさんで小田原と三島は重要な宿駅だった。三島には三島明神があり道中安全の守り神として旅人の崇敬をうけていた。源頼朝が鎌倉に兵を挙げ天下をとってからというもの幕府の庇護が厚かったといわれる。箱根から三島にかけ国道は海道そい山の背を縫って伊豆駿河の平原、富士の山容・駿河湾を右に左にくりひろげながらつづく。

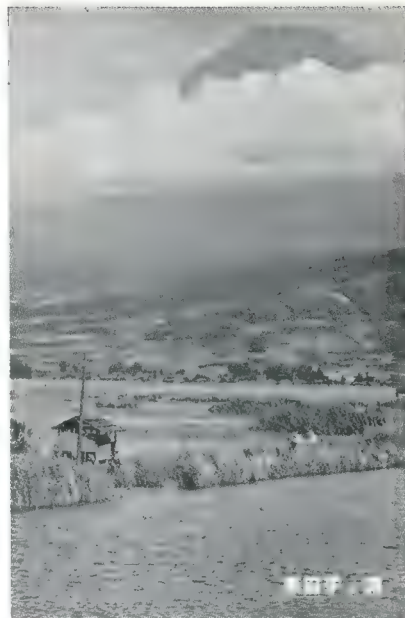
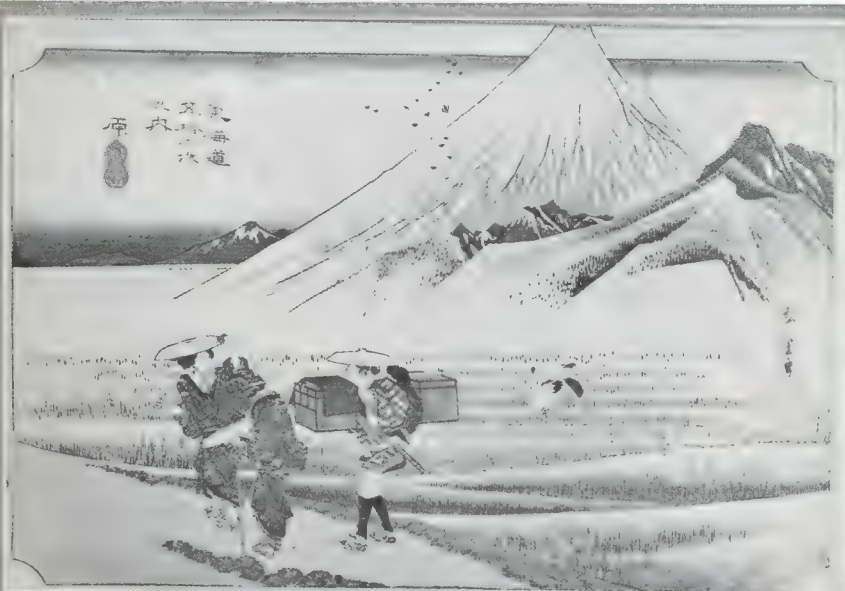
〔名所〕妙法華寺．錦田一里塚．山中城址．伊豆国府址

三島〔朝霧〕 五十三次版画の中で最も有名な一枚として知られる．箱根より三里二十八町．

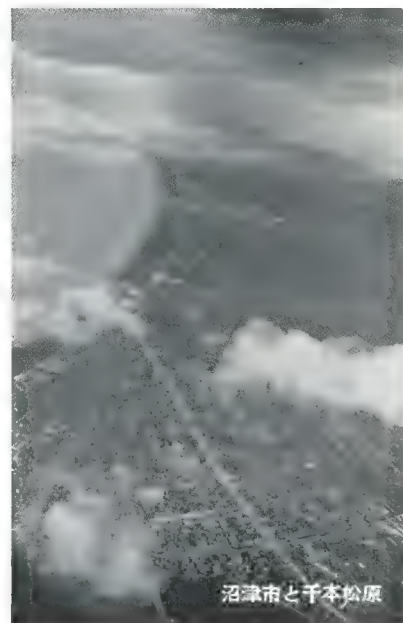
箱根〔湖水図〕 海道一の難所．箱根関所は道中の難所であった．　小田原より四里八町．

〔名所〕箱根温泉．箱根権現．大涌谷．〔名産〕寄木細工

箱根の山は宮のような形をしているので昔は宮の峰といったともいう。いずれにしろ海道の難所だった。江戸時代以前には足柄峠から御殿場に抜ける道があった。「足柄の麻萬の小菅の菅枕何かまかさむ児ろせ手枕」(万葉集)。国道も昔と同じように箱根の山を越す。東京へ向う定期トラック便は早朝に東京へ着くため真夜中に箱根を延々とくだる。

〔名所〕松蔭寺．丸子神社．足柄関．八重山．愛鷹山

「晴れて候又曇りて候不二日記」其角
「短夜や雲引きのこす不二の山」太祇
「目に懸る時や殊さら五月富士」芭蕉
「富士薄く雲より上に霞みけり」子規

原〔朝之富士〕 愛鷹山の裾野がのびて海岸へつづく一帯は沼沢地．　沼津より一里半．

沼津〔黄昏図〕 箱根の山を越えて，左に駿河湾をみながら沼津へはいる．三島より一里半．

〔名所〕黄瀬川．亀鶴塚．宗祇終焉地．頼朝義経対面地

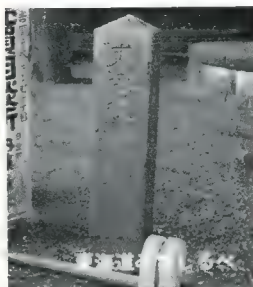
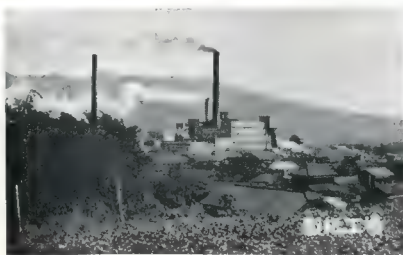
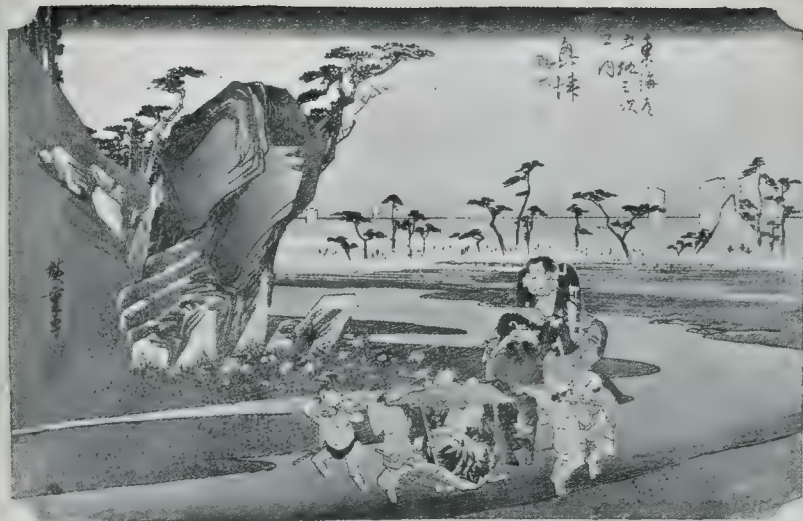
沼津の名物にわさびがある。といっても本場は伊豆天城山だという。それでも四季水温の変らぬ清流に育つというためか方々で栽培されている。

沼津市と千本松原

吉原をすぎると程なく富士川の流れに出る。江戸時代には東海道に渡場が十三ヵ所あった。そのうち徒歩越が六ヵ所、舟渡が七ヵ所だ。富士川は徳川期以前から舟渡であった。太田道灌の「平安紀行」にも舟渡のことが書いてある。富士川の常水量を正月から九月まで八尺(夏川)、十月から十二月までを六尺(冬川)と定め三尺増すと徒歩渡を禁じた。

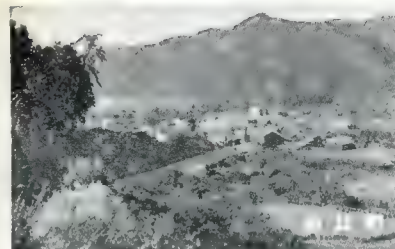
〔名所〕蒲原古城．富士川水鳥古蹟．浅間神社．富士川

蒲原〔夜之雪〕 五十三次の雪景の一つ．蒲原の手前は富士川の急流．吉原より二里三十町．

吉原〔左富士〕 吉原に入る手前で道は右に折れる．海岸は田子の浦．

原より三里六町．

〔名所〕東海道左富士．田子浦．富士沼．要石．芝瀬川

「天地の分れしときゆ神さびて高く貴き駿河なる不盡の高嶺を天の原ふりさけ見れば渡る日の影もかくろひ照る月の光も見えず白雲もいゆき憚りときじくぞ雪はふりける語り継ぎ言ひ継ぎゆかむ不盡の高嶺は」反歌「田子の浦ゆ打いでてみれば真白にぞ不盡の高嶺に雪はふりける」(万葉集)。東海道本線の車窓にうつる富士山もこの辺りで雄大になる。

興津〔興津川〕 干潟をわたる力士の一行．和名鈔では息津（おきつ）とかいた．由井より二里三十町．

〔名所〕清見潟．岫崎（くきがさき）．甲州身延山道．〔名産〕カツオ節

「清見が関は片つ方は海なるに関屋どもあまたありて、海までくぎぬきしたり。けぶりあふにやあらむ清見が関の浪も高くなりぬべし」清見ヶ関の古関は興津の西、清見寺の附近にあったらしい。天暦十年の国司解状や枕草紙の関の項にその名が見える。清見潟から三保松原にかけての風光を高山樗牛はことに愛した。彼の墓は有渡山下の龍華寺にある。

治承四年、源頼朝が関東に兵を挙げたので平家は平維盛を大将として討伐軍を差向けた。両軍それぞれ軍を進め富士川に対陣した。合戦前夜十月二十四日、水鳥の羽音に驚き平家は一戦も交えず敗退した。平家物語に委しい合戦である。

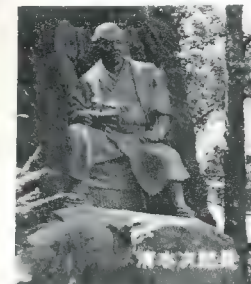
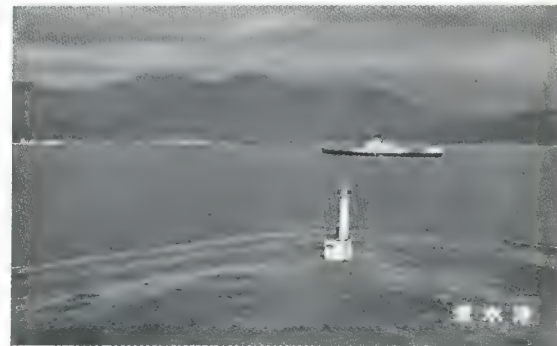
〔名所〕薩埵嶺．磐城山．豊積神社．〔名産〕温州ミカン

由井〔薩埵嶺〕 海道の一嶮岨．海は清見潟，古くは大和田浦（おおわだのうら）と呼ばれた． 蒲原より一里．

府中〔安部川〕 府中は今の静岡市．古くは阿部市とも呼ばれた． 江尻より二里二十七町．

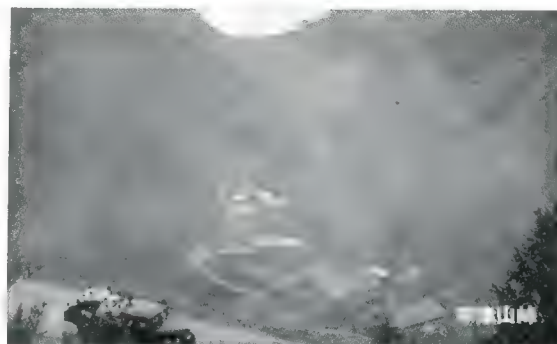
〔名所〕駿府城．浅間神社．登呂遺跡．〔名産〕静岡茶

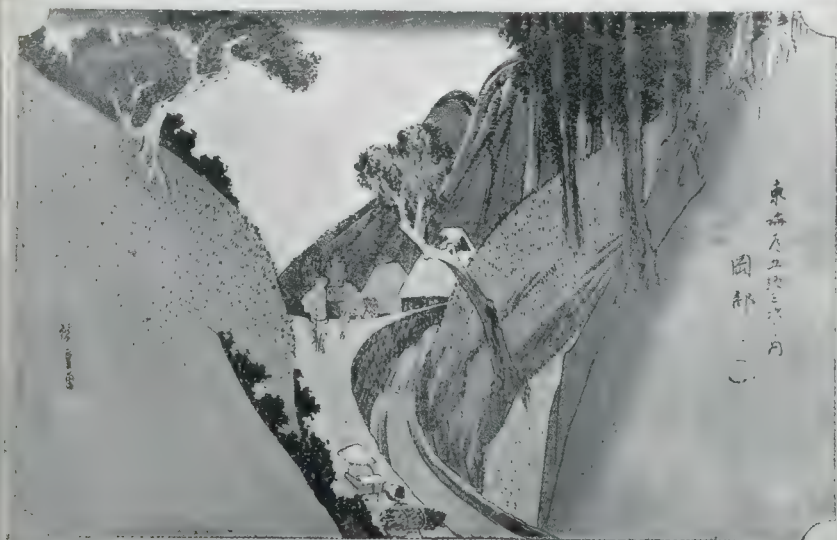
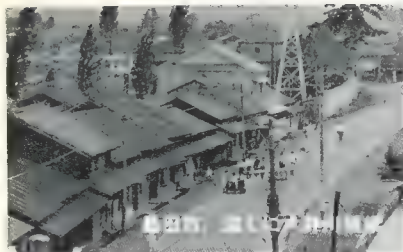
「廬原辺に吾か行きしかば駿河なる阿部の市道にあひし児らはも」春日蔵首老（万葉集）。君がためやよひになればよつまさへ阿部の市路にはこつむなり」源俊頼。賤機山は歌枕の一つ。「紅葉ちる賤機山のさを鹿はにしきをきてや妻を恋ふらん」大僧上慈鎮（拾玉集）。「ねぎことや賤機山のほととぎす旅ゆく我を木綿かけてとへ」太田道灌（慕京集）。

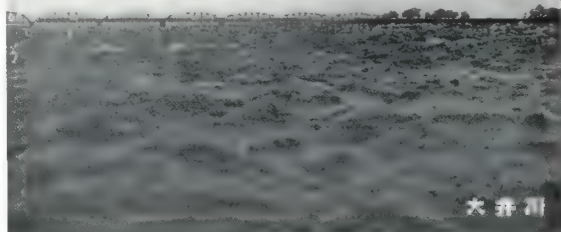
清水港は静岡茶の積出港であり東海地方の一中心を占める。港を扼する三保松原は万葉の昔からうたわれている。「いほはらの清見が崎の三保の浦の寛きみつつもの思ひもなし」。三保松原につたわる羽衣伝説は日本伝説の白眉として謡曲「羽衣」に組まれている。清水港の南方、日本平から観る展望は三保松原・清水港・富士山を一望に収めてつきない。

〔名所〕三保ノ松原．日本平．竜華寺．鉄舟寺．御穂神社

江尻〔三保遠望〕 日本平よりの景観．江尻は古くは廬原，今は清水市．興津より一里三町．

「宇津山蔦細道。宇津の山にあり。海道より右の方に狭道あり。これ古の細道なり。予、東路巡覧の時、細道をみんと土者二人案内とし備ひゆく。二人鎌を手手に持ち藤原に入り藤・茅を刈りて道を分る。篠竹すべて六尺より生茂りて仲々嶮路、所々こわりて漸く手を引かれて歩き行く（東海道名所図絵）。いまは砂塵をまいてトラックが疾走する。

〔名所〕那閇神社．中御門中納言墓．宇津山つたの細道

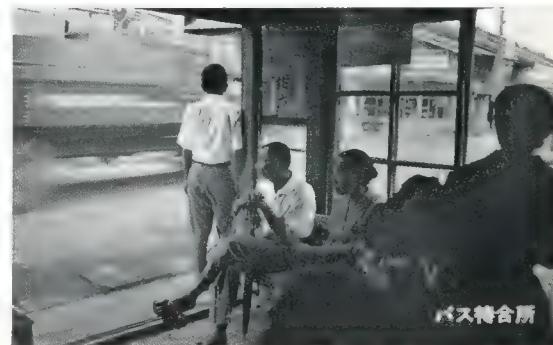
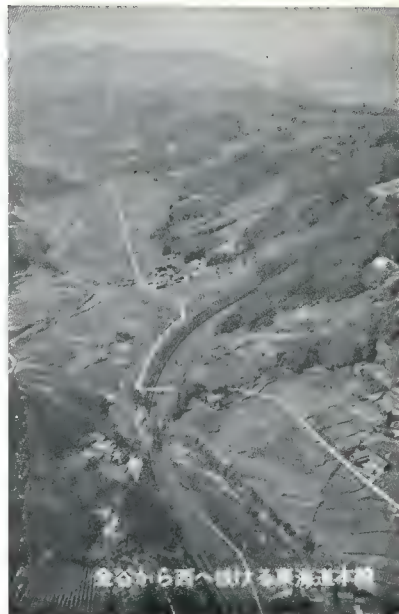
岡部〔宇津之山〕 宇津のやま，つたの細道として文に歌に名高い．　　丸子より二里．

丸子〔名物茶店〕 名物とろろ汁．丸子は手越の里の西方にあたる．　　府中より一里半．

〔名所〕連歌師宗長古蹟．手越古駅．木枯森．〔名産〕盆石

岡本かの子「東海道五十三次」より。丸子の茶店には…午前の陽は流石に眩しく美しかった。老婢が「とろろ汁が出来ました」と運んで来た。別に変った作り方でもなかったが、炊き立ての麦飯の香ばしい湯気に神仙の土のやうな匂ひのする自然薯は落ち付いたおいしさがあった。わたくしは香りを消さぬやうに薬味の青海苔を撒らずに椀を重ねた。

「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」一旦大井川が氾濫すると水がひくまで足どめを喰い、そのため大井川の両岸の島田金谷宿は足たまりとなり発達した。渡賃は水量の増減できめられている。平水帯通四拾八文、乳下水七拾文位、脇水九拾文より百文迄、乳上水八拾文、河水減じて二洲を表せば二十四文云々―元文六年(五駅便覧)。

〔名所〕瀬戸山．千葉山．牧ノ原茶園．大井川蓮台渡し

島田〔大井川〕 海道随一の難所，氾濫すると水がひくまで足どめ． 藤枝より二里八町．

藤枝〔人馬継立〕 旅人と雲助と伝馬．藤枝は古くは岩田といった．岡部より一里二十九町．

江戸時代、街道の主な駅には問屋場(伝馬所・馬締ともいう)が置かれた。問屋場には荷物貫目改め用に大秤を備えつけて荷物の目方を測り賃銭をきめ、また人馬(雲助と伝馬)の継立・貨物運搬の斡旋をし、明治維新までつづいた。

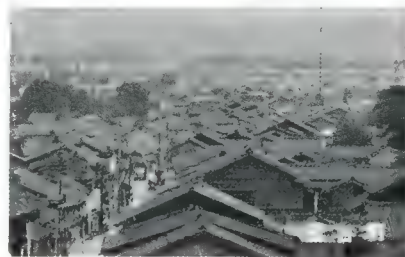
〔名所〕宇嶺ノ滝．田中城址．蓮生寺．鬼岩寺．志太温泉

金谷をすぎると佐夜の中山にかかる。夜泣石は昔約百米下った古道の中央にあった。「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山」西行法師（新古今集）。

〔名所〕妊婦塚．子育観音．諏訪原城址．阿波波神社

日坂〔佐夜中山〕 旅人は佐夜の中山「夜泣石」に足をとどめる． 金谷より一里二十九町．

金谷〔大井川遠岸〕 大井川を渡れば遠江国，金谷を蓁原(はいばら)ともいった． 島田より一里．

徳川幕府が大井川を舟で渡らせず歩渉制度をとった事は幕府の地位の安全を計ったためとされる。この制度も明治四年には渡船に代り大正十四年には現在の鉄橋になった。このため歩渉人足は一帯の茶園開発に従事するようになった。

〔名所〕敬満神社．大井神社．国立茶業試験所．〔名産〕椎茸

袋井宿は江戸時代に相当繁昌したらしい。旅籠がならび茶屋もでき「往年の旅人おのおの酒のみ。食事などしてゐたりけるを弥次郎兵衛みて『ここに来てゆききの腹やふくれけんされば布袋のふくろ井の茶屋』(東海道中膝栗毛)。太田川を渡れば鷺坂古戦場を北にのぞむ。「とほく見る富士の高根も白鳥のさぎさか山をけふぞ越えぬる」(飛鳥井雅世)。

〔名所〕敷地川畔．桜ヵ池．志留波磯．妙星寺．尊永寺

袋井〔出茶屋の図〕 袋井は江戸時代以前に繁栄した宿場町． 掛川より二里十六町．

掛川〔秋葉山遠望〕 秋葉山秋葉寺は禅宗の古刹． 日坂より一里二十九町．

東海道中で三島明神とならび庶民の信仰をあつめていたところに秋葉山がある。秋葉山三尺坊大権現は神とも仏ともつかぬ天狗で火よけの神として信仰が厚かった。明治維新後どういう訳か三尺坊は麓の袋井可睡斎へ遷ったという。

〔名所〕掛川城址．小国神社．ゲースペリト・ヘムミの墓

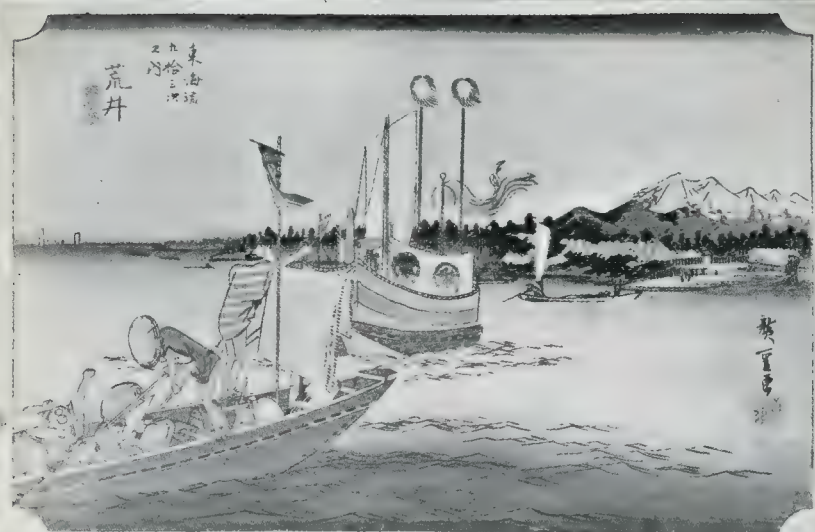
見付宿は江戸時代以前には寂しいところだったらしい。十六夜日記に「遠江見付のこふといふ所にとどまる。里あれてものおそろし」とかかれている。見付をすぎると天竜川。海道記に「大河にて水面三町計あれば舟にて渡る。流早く波さかしくして棹も差得ねば、大なる杌を持て横様に水かきて渡る」とあり、水勢のはげしい天竜川を物語っている。

〔名所〕三香野橋．金札鶴．熊野権現祠．佐久間ダム

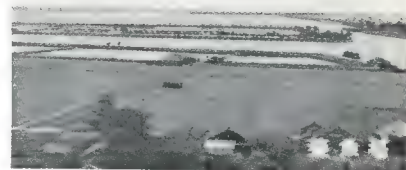
見附〔天竜川図〕 京より下る折はじめて富士をみるので見付の名がある　袋井より一里半．

浜松〔冬枯岡〕 浜松の手前の引馬野原．万葉集に名高い．　見付より四里八町．

〔名所〕浜松城址．鴨江寺．蓮華寺．犀ヶ崖．中田砂丘

浜松の凧あげはけんか凧である。毎年五月一日から五日間三方ヶ原にあつまり、二間四方の大凧を十数人かかってあやつり、他の凧とからませて勝負をきめる。「引馬野に匂ふはりばら入乱り衣にほはせ旅のしるしに」長忌寸奥麿(万葉集)。「はま松のかはらぬかけを尋きてみし人なゝに昔をぞ思ふ」阿仏尼(十六夜日記)。ほどなく浜名湖である。

荒井〔渡舟図〕 荒堰・新居ともいわれ関所として栄える．　舞阪より海上一里．

〔名所〕猪鼻湖神社．引佐細江．源太山．今切．遠州灘

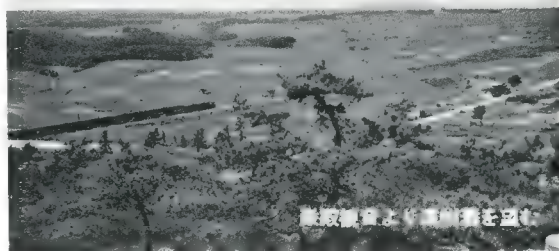
今切渡賃は万治元(一六五八)年頃は次の様であった。「舞阪より荒堰まで一隻の借切百卅文、尾州紀州の衆は百文、乗合は一人四銭、のりかけは人ともに十五銭、一駄荷は廿二銭也」(東海道名所記)。今切渡舟は危険だったという。そのため「舞阪一里、船にのるも馬鹿、乗らぬも馬鹿」の俚諺がうまれた。「舊も舞坂、天気も静か、名のみ荒井の船渡し」

浜名湖が遠州灘と接するところは明応八(一四九九)年の地震津波で切断された。そのため今切の名がある。次の荒井まで海上一里の船旅。縁談が決って通る婦人は「今きれる」を嫌い、浜名湖の北岸を迂回する本坂越をたどったという。

〔名所〕馬郡観音堂．賀茂祠．引馬野．弁天島．〔名産〕鰻

舞坂〔今切真景〕 舞沢ともいい右に浜名湖．左に遠州灘を望む景勝．浜松より二里三十町．

二川〔猿ヶ馬場〕 二川のやや東にある．堺川で遠江国と三河国に分れる．白須賀より一里．

二川のあたりは今でも松並木をとどめる。下り列車の車窓右手に小高い岩山があり観音像が建つ。巌殿観音である。「岩鼻やここにもひとり月の客」（去来）。二川のあたり堺川で遠江・三河の二つの国に分れる。一帯は赤松林である。

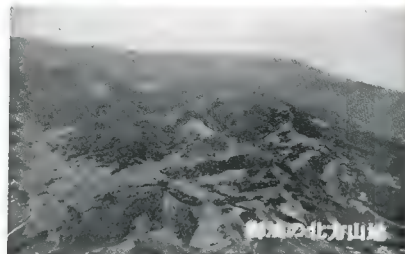
〔名所〕岩殿観音．猿ヶ馬場．普門寺．東観音寺．高師原

「汐見阪。白菅の東の阪路をいふ。眼下に滄海をみれば汐見阪の名あり。所謂、遠州七十五里の大灘眸を遮り弱水三万里の俤あり。渚の松緑濃く沖に漕ぎつれる漁舟は雲の浪にみへかくれ浪間の艀、浦浜の千鳥みるは汐見阪の眺望なるべし」（東海道名所図絵）。京都から江戸へ下る折はじめて海を見下す処であった。国道もほぼ同じ処を通っている。

〔名所〕汐見坂．高師山．白須賀湊．角避彦神社．橋本

白須賀〔汐見坂図〕 京より下る折，はじめて海をみおろす絶景． 荒井より一里二十六町．

御油〔旅人留女〕 御油は江戸時代に加えられた宿場．風情のまち．吉田より二里二十二町．

東海道の宿駅の中で、御油から赤坂にかけてもっともよく昔の形態をとどめているとされる。東海道本線が海岸をまわったためかもしれない。ことに赤坂あたりには昔そのまま張り出した二階をもった旅籠が海道筋に残っている。

〔名所〕二見道．大恩寺．御津神社．観音山．砥鹿神社

豊川稲荷は豊川市の曹洞宗妙厳寺境内にある。もともとお稲荷様は京都伏見稲荷山が本家である。東海道名所図絵によれば宝暦年間に牛窪西島の稲荷から豊川の平八狐のところへ婿入りさせたので、西島稲荷にひきかえて豊川稲荷が繁昌したという。それはとも角、伏見稲荷が神社で、豊川稲荷が寺であることは神仏混淆の結果できたものであろう。

〔名所〕吉田神社．豊川稲荷．鳳来寺．長篠古城址

吉田〔豊川の橋〕 吉田は三河国の主邑，今の豊橋市．二川より一里半．

藤川〔棒鼻図〕 天保元年．広重が御馬進献に随行した時の状景という．赤阪より二里九町．

〔名所〕山中の里．法蔵寺．万灯山．

安藤広重は天保元（一八三〇）年八朔に御馬進献の使が上洛する際、その随行の一人に加わり東海道五十三駅を往復した。この時のスケッチを基にして天保五年、竹内保永堂から東海道五十三次続絵―本書に集録―の木版画を出版した。この藤川棒鼻図は広重が随行した御馬進献の状景を描いたものといわれている。藤川をすぎればやがて岡崎である。

無理にひき込んだ客に夕食を出し亭主が自ら接待にあたり土地の話をきかせ、酒を供し歌をうたわせなどして旅情を慰めた。夜が明けるとハタゴをひらいて朝食をとり、早朝に宿を出立するのが例であった。（東海道名所記による）

〔名所〕宮地山．竹島．八百富神社

赤阪〔旅舎招婦図〕 赤阪は御油とともに招婦（ておんな）をかかえた家が多かった　御油より十六町．

池鯉鮒〔知立馬市〕 四月二十五日から十日間．海道一の馬市で有名．岡崎より三里三十町．

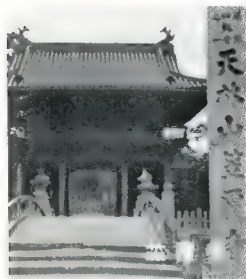
〔名所〕八橋古蹟．狭投神社
舞木廃寺塔址．新須磨海岸

池鯉鮒（知立）馬市には毎春四、五百頭の馬を集め、海道中の名物であった。古くは伊勢物語に詠まれた八橋の地である。「から衣きつつなれにしつましあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ」（在原業平）。「ささがにのくもであやふき八橋を夕ぐれかけて渡りぬるかな」（十六夜日記）。芭蕉は知立の賑わいを「不断たつ池鯉鮒の宿の木綿市」と詠んでいる。

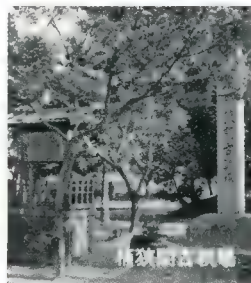
「五万石でも岡崎さまはお城下まで船がつく」と俚諺にいう岡崎は矢矧川にのぞんだ城下町である。江戸をはなれて七十余里ほぼ十日間の旅路である。伊賀越道中双六・浄瑠璃十二段草子など岡崎を舞台にした演劇はすくなくない。

〔名所〕岡崎城址．大樹寺．
滝山寺．〔名物〕三河万才

岡崎〔矢矧之橋〕 岡崎は戦国時代本田氏五万石の城下町であった． 藤川より一里半．

宮は名古屋市の南部、中京工業地帯の中心熱田あたりになり、昔の面影をとどめない。江戸時代以前の東海道は宮から北上し関ヶ原を通り中仙道に合していた。東海道本線とほぼ同じ経路である。国道は名古屋の中心部を西へ抜けて木曽川をわたる。道中の昔、宮から桑名へは船の旅である。「海くれて鴨の声ほのかに白し」(芭蕉)は宮の渡場であろう。

〔名所〕笠覆寺．名古屋城．白鳥陵．〔名産〕七宝焼

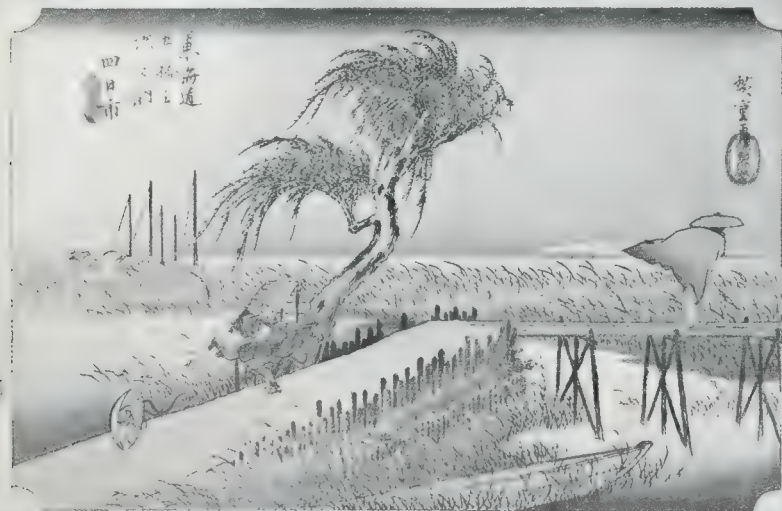
宮〔熱田神事〕 宮は今の名古屋市の南部．熱田神宮は草薙剣をまつる． 鳴海より一里半．

鳴海〔名物有松絞〕 紅と藍の木綿絞りは全国にゆきわたった． 池鯉鮒より二里三十町．

〔名所〕今川義元塚．鳴海神社．千鳥塚．〔名産〕有松絞り

「名産有松絞。尾州有松村の名物は木綿をいろいろに絞りて紅と藍とに染分つ云々」(東海道名所図絵)。戦国時代永禄三年五月十九日織田信長の軍勢が今川義元の陣に夜討をかけた桶狭間古戦場は国道そいにある。山王山で芭蕉は「星崎の闇をみよとやなく千鳥」と詠み太田道灌は「遠くなり近く鳴海の浜千鳥なく音に汐の満干をぞ知る」と嘆じた。

桑名とならんで四日市は伊勢海を囲む港町だった。海蔵川三滝川が街を貫流する。今日では精油工場の蒸溜塔が林立する近代港。那古浦は万葉集に「わがたたみ三重の河原の磯の浦にかばかり鴨と鳴くかはずかも」と詠まれている。

〔名所〕諏訪神祠．垂阪観音．建福寺．湯の山温泉

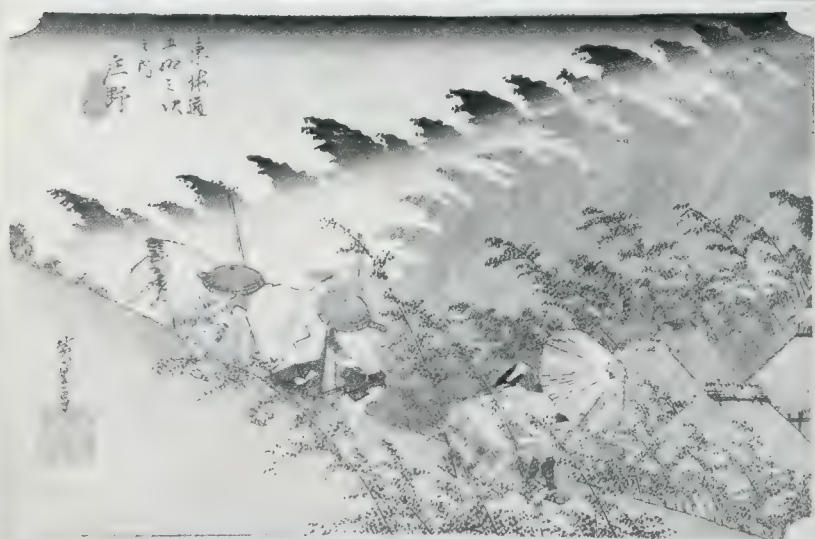
四日市〔三重川〕 三重川は別名三滝川．桑名と並ぶ港町．海は那古浦．桑名より三里八町．

桑名〔七里渡口〕 古くは間遠渡(まどうのわたし)といい海上の旅．桑名は勢州尾州の国境．宮より海上七里．

〔名所〕桑名城址．大福田寺 多度神社．〔名産〕しぐれ蛤

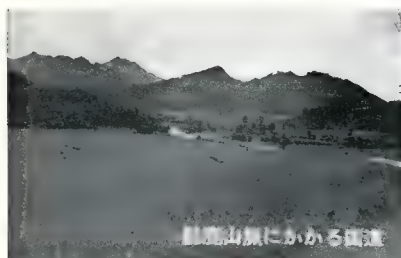
「七里渡し。むかし天武天皇大友皇子に襲はれ給ひ尾濃へ乱を避け給ふ時、渡口船の着岸おそきゆへ間遠しと宣ひ間遠の渡しといふ。勢尾二州の国境、渡口七里の間風景斜ならば西南に朝熊、二見浦、鳥羽の湊、東に三遠の浦々遥に見へて真妙の海路云々」(東海道名所図絵)。尾張から伊勢に渡るには二十刻(一刻は約二時間)ほどかかって航海した。

庄野から東にややはずれた処にある白鳥塚は日本武尊の霊地といい伝える。「此の時御病甚急になりぬ、ここに御歌して、をとめの床の辺に　わが置きし　剣の太刀　その太刀はや　と歌ひ竟へて即ち崩りましぬ。」鈴鹿川に沿ってゆく道は次第に高くなる。鈴鹿山地に近づくためである。庄野をでて二里、道はやがて伊勢平野の南辺、亀山にはいる。

〔名所〕伊勢国分寺址．白鳥塚

庄野〔白雨〕 三島・蒲原の図と共に五十三次中の傑作にかぞえられる．石薬師より二十七町．

石薬師〔石薬師寺〕 真言宗石薬師寺．伊勢参宮道がわかれる．　四日市より二里二十七町．

〔名所〕稚武彦祠．杖衝坂．山部赤人古蹟．安国寺址

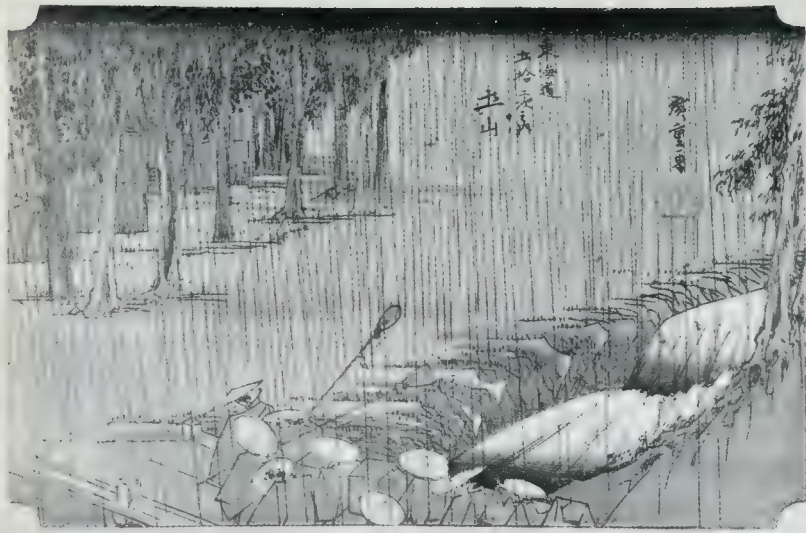
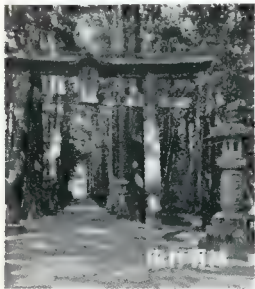
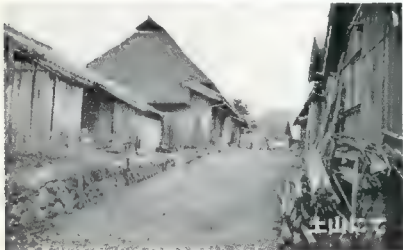
四日市から石薬師に至る間に伊勢参宮の日永追分がある。ここから左に入ると神戸・白子・上野・津を経て伊勢神宮に続く。石薬師は古くから伊勢参りの駅であったが元和二年に五十三次の宿駅に加えられたものである。海道筋には杖つき坂があり日本武尊東征の折、剣を杖にかえた故地とされる。芭蕉は「歩行ならば杖つき坂を落馬かな」と詠んだ。

広重の父源右衛門は元津軽家小姓頭、田中徳右衛門の孫であったが安藤十右衛門の養子となり火消の役についた。広重は十三歳で父の職を継ぎ江戸の火消同心となり二十七歳までつとめたといわれる。この「関」の画面で広重は本陣の庭に張りめぐらしたまん幕に父の実家「田中」の二字をくつわ形にくずし、大名の紋に擬して書きあらわしている。

〔名所〕布気神社．地蔵院．伊勢参宮追分．出羽の森

関〔本陣早立〕 大名の一行は本陣に宿泊して旅をつづける． 亀山より一里半．

亀山〔雪晴〕 鈴鹿川にそって遡ると亀山．亀山城は岡本下野守の居城． 庄野より二里．

〔名所〕亀山城址．亀山敵討遺蹟．専修寺．森の下

鈴鹿川は歌枕の一つである。
「鈴鹿川やそせの波はわけもせで渡らぬ袖のぬるる頃かな」(玉葉集)
「鈴鹿川ふりさけみれば神路山さかき葉わけて出つる月かげ」(続後撰集)
京都関西からの伊勢まいりは亀山から入った。今でも亀山は参宮線の分岐駅、人口四万の地方都市である。関西本線は亀山から西へ鈴鹿山脈をあえぎながら越す。

土山〔春之雨〕「坂はてるてる鈴鹿はくもる．あひの土山雨がふる」　阪之下より二里半．

〔名所〕田村明神祠　鈴鹿山．鈴鹿神社．琴之橋

「のぼりくだりのおつづら馬よ、さてもみごとな手綱染かいな。鈴をたよりに小諸節坂はてるてる鈴鹿はくもる。あひの土山雨がふる」

土山の東に田村明神がある。「一たび眼を張って怒給へば猛獣も身を縮め四足をかがむ、一たび笑給へば幼児も親みて慈母の如くす、面貌赤くして鬚うつくしく関羽の如し」。蝦夷征伐の大将坂上田村麿の容貌という。

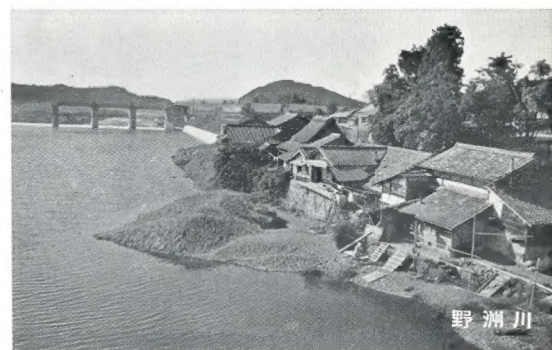
阪之下は今では国道ぞいの小さな部落である。古くは鈴鹿社の下にあったのであるが、慶安のころ水難にあって今の地にうつったといわれている。国道ぞいに一きわ高い筆捨山は西行法師の歌「すずか山うき世をよそに振りすてていかになりゆく我身なるらん」で有名。ようやく山をのぼりつめた国道はトンネルで土山へぬける。草津まで下りになる。

〔名所〕鈴鹿峠．八十瀬川．筆捨山

阪之下〔筆捨山頂〕大和絵巨匠法眼元信をして筆を挫かしめたという．　関より一里半．

鈴鹿山脈に源を発した横田川は水口あたりで平地に出る。川は山裾に扇状地をつくり石礫が川底に敷きつめている。川底は平地よりも高くなり民家の屋根は川底より低い。これが天井川である。道も鉄道もトンネルで川をくぐりぬける。行手に三上山が大きくせまってくる。道中を旅した昔も、三上山がみえると京都も遠くないことを教えてくれた。

野洲川

かんぴょう

野洲川

〔名所〕水口神社．大岡寺．飯道寺．蓮華寺．山上庚申

水口〔名物干瓢〕横田川にそって下れば水口．付近は干瓢の産地．土山より二里二十九町

石部〔目川の里〕「ぜさい」は海道中の名物．旅人は腰をやすめる． 水口より二里十二町．

和中散本舗

和中散を作った機械

〔名所〕金勝寺．阿弥陀寺．妙感寺．善水寺．目川の里

石部と草津の中ほど、目川の里には道中薬和中散の薬店が三軒ほどあって家号を是斎（ぜさい）といった。東海道を上下する旅人は草鞋をぬぎ、散湯にしたしんで旅をつづけた。江戸にくだるもの、京都にのぼるもの、誰でも一度は骨を休め、疲れをとったところである。国道は右手に琵琶湖の水田地帯をくりひろげながら草津にはいってゆく。

三上山

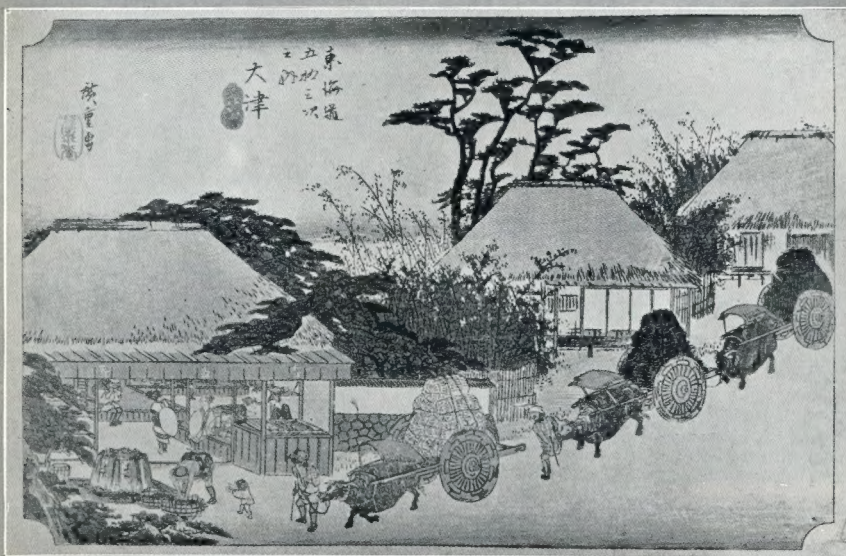
逢坂山峠. 向うは山科

琵琶湖

大津市

東海道五十三次の最後の宿駅江戸を去ること百二十余里、十数日間の道中もあがりに近い。三条大橋まであと三里。琵琶湖をふりかえりながら逢坂山の峠をのぼりつめる。山科の盆地を過ぎれば京都である。東海道の旅も終になる。

〔名所〕三井寺. 膳所城址. 円城寺. 義仲寺. 堅田浦

大津〔走井茶店〕 京へ行く牛車. 大津は東海道五十三次最後の宿場. 草津より三里半.

草津〔名物立場〕 草津は中仙道と東海道の追分. 名物「うばが餅」. 石部より二里二十五町.

国道と東海道本線は草津でふたたび並行する。以前も中仙道・東海道が合するところでその繁栄ぶりは想像に難くない。草津から琵琶湖をわたって大津に着く一里の船旅を利用する人も多かった。道は瀬田唐橋・膳所から大津へ入る。

〔名所〕立木明神祠. 三上山. 草津追分. 新善光寺

うばもちや

瀬田唐橋

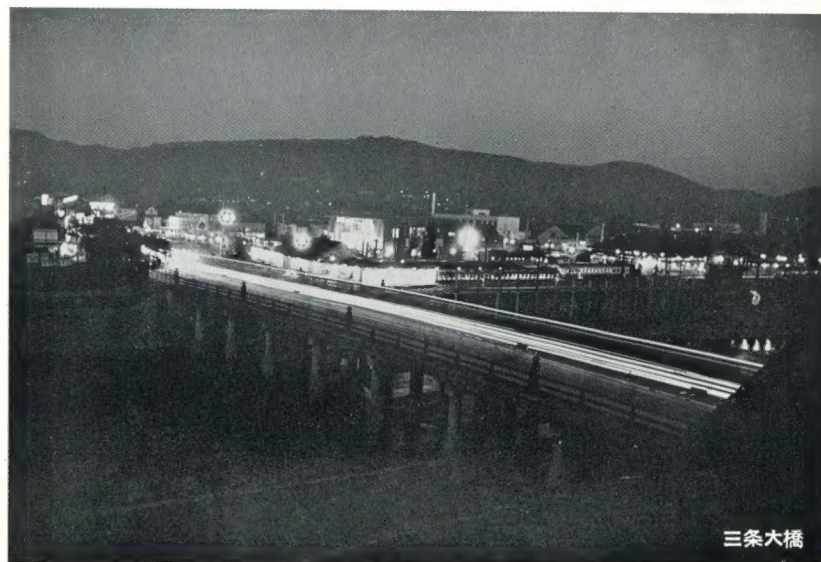
琵琶湖

岩波写真文庫目録

新刊

256 新潟県
257 村と森林
258 茨城県

*印は品切でございます

京師〔三条大橋〕旅のあがり．加茂川にかかる三条大橋をわたって入洛． 大津より三里．

三条大橋．日本の古い都，京都． 京都はしっとりとした昔のすがたを今にのこしている．

東海道五十三次 7

¥ 100